

2023年度 コロナ5類に移行後の報告

こども病院ボランティアとコーディネーターの会
ボランボラつな新聞

第16号発行 2024・5・1
 事務局 新宿区若松町10-1-302
 ☎080-5527-4379
 代表 坂上和子



沖縄南部医療センターこども医療センターで勉強会

- ボランティアコーディネーター加盟団体
- ・宮城県立こども病院
 - ・埼玉県立小児医療センター
 - ・神奈川県立こども医療センター
 - ・長野県立こども病院
 - ・静岡県立こども病院
 - ・大阪府立病院機構大阪母子医療センター
 - ・沖縄県立南部医療センターこども医療センター
 - ・NPO法人病気の子ども支援ネット遊びのボランティア

- 主な活動**
- 4月 事務局会議
 - 5月 事務局会議
 - 6月 ①ボラコWEB会議
②ボラコ新聞第14号発行
 - 9月 ①事務局会議
②ボラコWEB会議 裁縫ボラ
 - 10月 ボラコ新聞第15号発行
 - 11月 事務局会議
 - 12月 ポケモンプレゼント(神奈川が調整)
 - 1月 事務局会議
 - 2月 JVCC2日間
 - 3月 ①沖縄・南部こども医療センター訪問
②あいち小児保健医療センター訪問
③総会 (ボラコWEB会議)

事務局より「コロナ禍で学んだつながりの大切さ」

2023年度の主な活動を左表にあげました。裏面では各地のボランティア復活状況を報告しています。約5割から9割とあり、従来の活動がかなりの割合で戻ってきました。コロナ禍では社会全体が暗く落ち込みました。とくに病院は厳しく、ボランティア活動もほとんど閉じられました。都内のある小児病院は250名規模の会員を有するボランティア団体でしたが会を閉じる、そんな事態も起きました。そうした八方塞がりの中、私たちが大事にしたのは活動をゼロにしないこと、どこかに火種を残しておこうとズームで話し合っていました。「これが出来なくなったが、でもこれは出来ている」という「出てくること」を大事にしてきました。たとえば沖縄。ここは地域の団体と連携して外出が制限された付き合い家族のため食事を導入しました。「東京の坂上さんたちがなさっている付き添いへの配慮、お母さん食堂」に習いました」ということでした。もしこうした会がなければ、病院ボランティア活動は真っ先に閉じられ、今も休止中かもしれません。コロナ禍だったからこそ、当会の役割の大切さが見えたことです。さて、2024年度のスタート地点、ようやく火種を使うときがきたようです。病棟にもボランティアが入るようになっていきます。これからは何が起こるか分かりませんが、お互いのつながりを大切にしていよいよ療養環境作りを目指します。

NPO法人病気の子ども支援ネット遊びのボランティア
 当会代表 坂上和子 (ソーシャルワーカー)

ボランティア活動の火だね 絶やさずつなげよう



↑ あいち小児医療センターでボランティア交流会に参加

あいち小児保健医療総合センター「感謝のつどい&ボランティア交流会」に参加して。

神奈川県立こども医療センター 加藤 悦典

ZOOMと対面のハイブリッドで行われ、伊藤浩明センター長から「ボランティアさん達の活動をみていて、どんな病気や障害があっても子どもは子どもという感じで、きょうだいの事、学校の事等、気がつかさせられる。スタッフも学ばせてもらっている。」と感謝の言葉が述べられました。今回、5つの活動団体(ぶくぶくバルーン・ドックセラピーCANBE・スマイリングホスピタルジャパン・ホスピタルクラウン・RIT)と、個人ボランティア(水槽で生き物を飼う世話する・カード作り・ボードゲームなど)の報告と実践もあり、ワクワクするものでした。 あいちでは、CLS・HPS・保育士の方が兼任でコーディネーターの役割を取り、とても丁寧に入れ入れや対応をされている事がわかりました。コロナ禍の中やアフターコロナでは、さぞ大変だった事でしょう。百人活動していたボランティアさんが14人になったという事でしたが、水槽のなかで優雅に泳いでいる金魚を見て、ボランティアさんがやりがいを持ち、また感謝されながら活動し、お一人お一人が大事にされていて、それがあたたかい施設であるゆえんに思われました。センター長は専任のコーディネーター配置の難しさも話されましたが、最後まで参加されていたセンター長にとってもこころ強さを感じました。ボランボラからは4人の参加でしたが、大切な機会をありがとうございました。

↓ JVCC会場で
左から坂上代表、富澤、加藤、山崎所長



JVCC役員となって
 埼玉県立小児医療センター 富澤真麻

日本ボランティアコーディネーター協会主催の「市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会」にて、「いま、福祉施設・病院でどんなコーディネーションをめざす?」を語ろう、元気なコーディネーターになるコツ」という分科会を開催いたしました。

埼玉県の病院と千葉県の児童福祉施設から、コロナ禍の経験を含めた事例報告をいただき、その後、参加施設のボランティア活動における問題を共有して「この『逆風』をどう乗り越えるか」「どんなスタンスで立ち向かうか」を考えました。

今回はあえて立場の違う社協のコーディネーターに講師をお願いし、課題を論理的に整理した上で、雰囲気や感情に飲み込まれがちな現場のコーディネーションを「目標を定めていかに戦略的に進めるか」「それができるのはボランティアコーディネーターだけ」と参加者の背中を押していただきました。

普段から一人業務であったり、病院とボランティアの間で右往左往しがちな立場で不安な部分が多くありましたが、この分科会で、ようやく自分の「スタンス」や「心がけ」がはっきりしました。明日からのエネルギーになりモチベーションが上がりました。